

保育実践：あきの思いに寄り添って（1）

鈴木 政勝・小野 美枝*
(幼児教育) (三豊市立二ノ宮幼稚園)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*767-0021 三豊市高瀬佐股甲1508-1 三豊市立二ノ宮幼稚園

Educational Practice in Kindergarten : Nestle Close to the Mind of Aki (1)

Masakatsu Suzuki and Mie Ono*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

*Ninomiya Kindergarten, 1508-1 Ko, Samata, Takase-cho, Mitoyo 767-0021

要旨 本研究では、小野は、小野による幼稚園3、4歳児クラス、あきを中心とした保育実践に関して、鈴木と共同研究を行った。小野は鈴木との話し合いを通して自らの子ども理解やかかわりをさらに捉え直し、次の保育実践につなげていった。あきは、少しずつではあるが、大きく変容していった。

キーワード 幼児教育 保育者 内面の理解 寄り添う 実践記録

I. はじめに

本稿は、幼稚園教諭である小野と幼児教育(保育)研究者である鈴木との共同研究を報告しようとするものである。

共同研究者の一人、小野(以下、小野保育者と呼ぶ)は、A幼稚園、3歳児クラス(14名)の担任となった。そして翌年も、その同じ子どもたちの4歳児クラス(22名)を担当した。

その3歳児クラスの中の一人、あきは、次のような子どもでもある。

クラスのある子どもが小麦粉粘土を平たくのばし、おもちゃの型抜きで形を切り抜いて遊んでいる。外遊びから帰ったあきはそれを見て、小麦粉粘土に手を伸ばす。そして、その子どもが型抜きを使っているのをみたと思うと、黙っ

て取ってしまう。取られた子どもは怒って取り返そうとする。2人は、型抜きを取りあう。

クラスの子どもみんなが、音楽に合わせてリズム遊びをしている。あきは側で踊っている女の子2人に「先生、この子はちゃんと(きちん)と踊らんよ」「あなた下手やな。私は上手やで」と言う。2人は、言われたことが辛く、泣き出してしまふ。

小野保育者は、あきがなぜこういう行動をするのか、その時その内面でどのようなことを感じ思っているのか、よく分からない。それゆえ、保育者としてどのようにかかわっていったらよいのか、よく分からない。

小野保育者は、この事態を打開するため、その日のあきの行動を思いだし、詳しく書いてみることにした。また、詳しく書いてみることを

通して、**あき**がなぜこういう行動をするのか、その時内面でどのようなことを感じ思っているのか、理解しようとした。そして、その理解したことも詳しく書いてみることをした。

このことを積み重ねることにより——少しずつであるが——**あき**が内面で感じていること、思っていることに、気づき、理解できるようになってきた。

また、小野保育者は、その日の**あき**に対する自分のかかわりを思い出し、詳しく書いてみることにした。詳しく書きながら、**あき**にどのようにかかわっていったらよいと考えたのか、どのようにかかわったのか、そして**あき**は自分のかかわりをどのように受けとめ、どのように変容していったのか、捉えようとした。そして、捉えた点についても、詳しく書いてみることにした。

このことを積み重ねることにより、どのようにかかわっていったらよいのか、少しずつ考えられるようになってきた。が、同時に、自分の内面の理解はこれでよかったのか、また自分のかかわりはこれでよかったのか確信がもてず、悩むということに直面することになった。

そこで、小野保育者は、鈴木と共同研究を行った。小野保育者は、自分の保育実践記録に基づき、**あき**はなぜこういう行動をするのか、その時の内面の思いはどのようなものなのか、自分の理解を話した。また、その内面の理解に基づき、保育者としてどうかかわっていったらよいと考えたのか、どのようにかかわったのか、そして、**あき**はそのかかわりをどのように受けとめたのか、今自分が確信をもてずに悩んでいることも含めて、話した。鈴木は、小野保育者の実践記録を読み、また話を聞き、**あき**は、その内面でどのように感じ思っているのか——共同研究者としての立場からの——鈴木の理解と考えを述べた。小野保育者は、鈴木との話し合いを通して、自らの理解とかかわりをさらに捉え直し、次の保育実践に生かし、つなげていった。

小野保育者は、その保育実践についても詳しく書いた。

本共同研究は、このような研究方法で、実施されている。それゆえ、本共同研究を報告するにあたって、次のような構成をとりたい。

1. 保育者の立場からの、小野保育者による3歳児クラスにおける保育実践記録
2. 保育者の立場からの、小野保育者による4歳児クラスにおける保育実践記録
3. 共同研究者としての立場からの、小野保育者の3歳児クラス、4歳児クラスにおける保育実践記録を読んだの、**あき**はどのような子どもであるのか、鈴木を理解と考へ本稿、すなわち、「保育実践：**あき**の思いに寄り添って（1）」では、このうち、「小野保育者による3歳児クラスにおける保育実践記録」を取り上げ、報告する。

II. 小野保育者による3歳児クラスにおける保育実践記録

日々の保育の中で保育記録（エピソード）を書くにあたって

子どもの記録をとることは、保育記録を書き上げることが目的ではなく、子どもの言動記述を差し障りのない表現で記載するのでは意味がないと思う。その子のありのままの姿を記録し、読み直し「教師の解釈（子ども理解）はどうだったか、指導・援助の仕方が適切であったか」を探っていくことに意味があると考えます。子どもの言動だけを捉えると単に行動の記載となる。その時の子どもの表情（目線）、つぶやき、行動、周りの状況などを考慮しながら、子どもの思い（内面）に近づいていきたいと考えます。子ども達との毎日の生活の中で、瞬時に子どもの内面を探り、それに応じた援助をすることは、たやすいことではないと日々痛感している。それゆえに子どもと教師自身の日々の記録をとり「私（教師）がどう感じ、どう行動（援助）をしたか」を検証していくことで、次の保育につないでいけるのではないかと考える。記録をとっても、それを次につないでいかなければ意味がない。「記録を取り、読み直し、また次につないでいく」この繰り返しの中で、私の

なすべきものが少しずつ見えてくると考える。

3歳児**あき**の保育記録(エピソード)をとり、反省的考察をしていく中で「教師(私)のかかわりは、**あき**の育ちにどう影響したか」「3歳児が集団生活の中で他者をどう意識していき、どう成長していくか」を探りたいと考える。

1. 入園当初の**あき**の様子

あきは家族の愛情をいっぱい受け、特に祖父からはとてもかわいがられて育ったと母親から聞いた。**あき**は叱られることもあまりなく、まるごと受け止めてもらえて素直でのびのびと育っていると私も彼女を見てそう感じる。語彙が豊かで自分の思いを表現でき、3歳児とは思えない会話ができる。初めての集団生活で無理なく母親からも離れ、入園当日から楽しそうに過ごしている。生活習慣面では、便所に誘うと「私は紙おしめだから便所にいなくてもいい。ここですればいいの」と言う。給食面では、じっと座って食べることが苦手で、一口食べると「もういらない」と遊びだすことがある。自分の思いをのびのびと表現できるが、自分の思いのままの行動をとることがあり、些細なことが原因でトラブルが見られる。

3歳児のクラスでは「大人のような会話ができる子」「まだ片言ぐらいしか話せない子」「不安になりすぐ泣く子」など個人差が感じられる。子ども達たちは、まだお互いに意思の疎通がうまくできにくいと、些細なことでトラブルになる。そんな子ども達の中で、**あき**が周りの子にどうかかわっていくか追跡していき、教師は適切なかわりができているかを考えていきたい。**あき**の気持ちを受け止め寄り添っていき、内面理解をはかりながら、3歳児の発達の様子を探っていきたいと考える。

2. 【それは私の自転車だよ!】(自分なりの遊びをしたいようにして楽しむ) 入園翌日

登園後、鞆を片付けると、**あき**は一目散に黄色の自転車を取りに行き園庭を走ってのびのび遊ぶ。「先生!①見てて。私、自転車(乗るのが)うまいやろ!」「先生!見ててよ。早く走れるよ」と、思いを伝える。しばらく、自転車で走り回ると、滑り台の下に自転車を止め、滑

り台で遊ぶ。同じクラスの男児がその自転車に乗ろうとすると、滑り台の上から「だめ!それは私の自転車だからさわらないで」と大きな声で叫ぶ。急いで降りてきては自転車に乗り、園庭を一回りするが、また自転車を止め、滑り台へ登っていく。そこへ年長児がやって来て、自転車に乗ろうとした。**あき**は②「だめ!だめだめ。取らないでよ」と、叫びながら滑り台から降りて来て③「これは私の自転車だから、さわっちゃだめよ」と言う。年長児は「ごめん。ごめん」と、優しく**あき**に自転車を譲ってくれた。すると**あき**は④「みなさーん!この黄色い自転車はわたしのでーす!さわらないように」と、周りの子に聞こえるように大きな声で叫び、また滑り台の上に駆け上っていく。滑って降りては、自転車で園庭を一回り走り、滑り台へと繰り返して遊ぶ。

考察

好奇心旺盛で、幼稚園のいろいろなものに興味を示す**あき**。「滑り台もしたい」「自転車にも乗りたい」と、自分の興味の向くままにいろいろなことをしているのであろう。①「見てて」と言う言葉から自分のことに関心をもってほしいという思いが強く感じられる。

入園して間もない4月であるが、のびのびと過ごせ②、③、④のように自分の思いをきちんと言葉で表すことができる。年長児にも言葉で思いを伝えることができていると思う。愛情をいっぱい受けて育った**あき**は家族の温かいつながりに支えられ心が安定し自己発揮できるまでに育っている。ありのままの自分を出せる今の姿を受け止め、これからも安心して遊び込める自由な雰囲気環境として提供していきたいと考える。

3. 【リボンのパンツは濡らさんからね!】(紙オシメから布パンツに切り替える) 4月

あきは、排泄に誘うと「おしっこでない」「トイレは嫌だ」と、便所に行きたがらない日が続いている。入園して2週間がたつので、私は紙おしめを布パンツに切り替えたいと思っていた。**あき**は園庭で三輪車の乗り走っては止まり、気になることがある様子で、もぞもぞズボ

ンを引っ張っては、また三輪車をこいでいた。私は、紙おしめが膨らんで気持ちが悪いのではないだろうかと思い「あきちゃん、替えて来たら、三輪車でもっと速く走れるかもね？」と声をかけた。すると今日は素直についてきた。あきと新しい紙おしめをもって便所にいこうとすると、1人の女の子が「おしっこでる」と便所に入って来た。その女の子は排泄が自立しており、さっさと1人で排泄を済ませ外に出かけて行った。あきは「あの子は、おしめでないん？私の（紙パンツ）と違うな？」と、不思議そうにつぶやく。「そうやね。パンツだからおしっこが早くできるね。すぐに遊びに行っちゃったね」と私が言うと、黙り込むあき。彼女なりに何か考え込んでいるように私には感じ取れた。紙おしめとズボンをはかせた後に「あきちゃんもパンツにしてみようか。お便所に行くのが楽しくなるかもね」と、手をつないで2人で三輪車のところに戻った。降園時、お母さんに今日の出来事を話し、布パンツを多めに持ってきてもらうようお願いした。その翌朝、「見て。かわいいやろ。リボンがついたパンツだよ」と、嬉しそうに布パンツをカバンから取り出しみせるあき。「きれいなパンツだから濡れたらもったいない」と、喜んで、布パンツに着替え外に出て三輪車で遊びだした。時間を見計らい「そろそろおしっこしてこようか？」と、私が声をかけると「えー」と、嫌そうにあきは返事をする。しばらくして「もうそろそろトイレに行ってみる？リボンのパンツ汚したらもったいないもんね」と、あきの言葉を真似て声をかけると「そうだった」と嫌がらずに便所に行き排泄できた。パンツに切り替えてからは、嫌がらずに便所に行くようになり失敗がほとんどなくなってきた。

考察

あきは「何故今、便所に行かなくてはいけなのか？」「今は遊びたいのに部屋に入らなくてはいけなのか？」など園の生活の流れを不思議に感じたのだろう。家庭の生活ペースと集団生活では違いがある。しかし、それは大人側の考えであり、子どもにとっては集団生活の

ルールに合わせることに抵抗があるのは当然であろうと思う。大勢の中で生活する中で、幼児は周りのことに（友だちのことにも）少しずつ目がいくようになる。あきも「私と〇〇ちゃんは何が違う」と気付き、クラスの子と同じようにしたいという思いがあきに芽生えた。あきはよい意味で負けず嫌いの面が感じられる。排泄が自立するまでに時間がかからなかったのは、その性格が良い方向に伸びていったと考える。

4.【私はかわいいよ】（友達の遊びに自分から入っていく） 5月

汽車のジャングルジムで2人の女の子と1人の男の子が「お姫様と王子様」の役になって遊んでいた。汽車に乗って旅に出ると楽しそうに遊んでいるので、私も「一緒に連れて行って」と声をかけると「いいよ。乗って」とジャングルジムの席を空けて私に譲ってくれた。そこへ自転車で走ってきたあきが「先生ここにいたの。私もよせて」と声をかける。2人の女の子は顔を見合わせ、どう返事をしようか考えている様子である。すると1人の女の子が①「ここはかわいい女の子しか入れません」と、返事をした。するとあきは②「じゃ、私はかわいいから入れるわ」と答えた。あきは、何事もなかったように笑いながらジャングルジムに登り遊ぶ。「みんな見てて。私はてっぺんまで登れるよ。すごいでしょう。③「みんなは出来んやろ！」と、得意そうに登る。「あっちへ行こう」「うん」と、3人は砂場に向かって駆けていった。「みんなどこいったん？先生一緒に遊ぼう。私こんなこともできるよ」と登ったりぶら下がったりして、3人が他の場所に行ったことを気にもせず遊ぶ。

考察

この出来事には、昨日の出来事が影響しているのではないかと考える。昨日、クラスみんなが音楽に合わせてリズム遊びをしていた時、あきは側で踊っている女の子2人に「先生！この子は、ちゃんと（きちんと）踊らんよ」「あなた踊り下手やな！私は上手やで」と、言った。2人はあきからそう言われたことが辛く泣いてしまった。

あきは「なんでも1番上手に自分ができる」という自負をもっているようで、何かをした後に自分を誉めることがよくある。**あき**だけでなくこの時期の子どもは、周りの子ができないことを自分ができた時には得意になり自信を持つ。「自分はできる」という自信を持つことは子どもの成長に重要であると考え。その自信が次のステップにつながると思う。しかし、言われた側の子はどう感じるだろうか。3歳児がクラスの子どもにかかわりはじめたこの時期では、相手の気持ちに気づくことは難しいと思う。私の憶測であるが、2人は、ジャングルジムで遊んでいた時も、**あき**から昨日のように嫌なことを言われるのではないかと、自分達のしたいように出来なくなるのではないかと思ったのかもしれない。3歳児にも嫌なことから逃れたいという思いがあり、このように回避する行動をとろうとして①の言葉で、防衛線をはったのではないかと推測する。しかし①の言葉の表現に私は驚いた。この女の子も3歳児とは思えない言葉の表現力である。昨日は**あき**が表現的にきつい言葉を発した。そして、今日は2人が**あき**にきつい言動をとった。3歳児のクラスの子どもとかかわりはじめたこの時期は、こんなことを言えば相手が辛い思いをするなどはまだわ

からないであろう。だから、互いにきつい言葉が飛び交うこともよくある。このような自己中心的言動も3歳児のこの時期の姿だと思う。**あき**の相手の言葉をかかわした②の言葉の表現力はみごとで私は感心した。③の**あき**の言葉が追い打ちをかけ、3人はその場からいなくなったのかもしれないと思う。**あき**は全く悪気がないが、受け止めた側は面白くなかったのだろう。3歳児のこの時期だからこそ、ストレートな表現をするのだろう。何気なく言った言葉でも言われた側は辛い気持ちになることがある。集団生活の中でこのような経験を積んでいく中で、悔しい思いをしたり、折り合いつけたり、自己抑制をしたりして、人とかかわりをお互いに学んでいくのだろうと思う。

この事例のように、言葉を発した側と受け止めた側には思いの違いがあるのかもしれない。そこで、子どもの行動を記録にとり、2者の内面の思いを推測する記録を取ることで、子どもの内面をより理解できるのではないかと考える。**あき**の行動と**あき**の思い(内面)、**あき**とかかわる子の思い(内面)、その時の教師のかかわり(留意点)の表にして保育記録を書くことにする。

5. 【先生、山んばになって】(自分なりのイメージを見つける面白さを味わう) 6月

子どもの活動	あき の内面(思い)	他児の内面(内面)	留意点
① あき が1人で滑り台を滑っているのを、教師が後ろから「 あき ちゃん待って」と滑っていく。	②先生に「まで」と追いかけて3枚のおふだの小僧さんになりたい。		③ あき は1人で遊んでいることが多いので、教師と一緒に遊ぶことでその場に他児が集まってくるのではないかと。そこで、 あき と他児とのかかわりがもてるきっかけづくりをしていきたい。
④「先生か。びっくりした」と振り向き笑う あき 。「そうだ。先生、山んばになり。私は逃げるからね」と あき が言う。	⑤そうだ!昨日、聞いた「3枚のおふだ」ごっこを先生としよう。		

<p>⑥「つかまえてみな！」 「私は走るのが速いからね。山んばなんかには、つかまるものか」と大きな声で言いながら、途中で何度も教師の方を振り向き笑いながら、逃げるあき。</p> <p>⑩2人の男の子と2人の女の子が「よせて」とやってくる。「いいよ。先生はな、山んばだから、つかまったら食べられるよ」と答えるあき。5人と教師でしばらく追かけっこを楽しむ。</p> <p>⑫あきは「のいて、じゃま、じゃま」と階段を登っている男の子を引っ張る。</p> <p>⑬片付けの音楽が流れると「先生、おもしろかったね。またしようね」と言いながら部屋へ駆けていく。</p>	<p>⑦先生が追いかけて来たな。つかまるもんか。いそいで逃げよう。おもしろいな。</p> <p>⑪みんなもよせてあげよう。</p> <p>⑬早く階段を登りたいのに前の子がゆっくり登るのでじゃまだな。私が先に行きたい。のいてもらおう。</p> <p>⑰追いかけてっこは、おもしろかったな。</p>	<p>⑨先生とあきちゃん、楽しそうに遊んでるな。おもしろそう。一緒に遊びたいな。</p> <p>⑭あきちゃんに引っ張られる。嫌だな。</p>	<p>⑧あきが偶発的に始めた遊びに教師も仲間に入り、鬼ごっこへと誘導しながら、「みんなと一緒に遊んで楽しかった」という体験をさせたい。</p> <p>⑮あきは、機敏に動けるので、スローな友だちの動きを待てないのだろう。自分が逃げることに没頭しているのので、前にいる子を押しつけたのだと思う。男の子の気持ちを代弁し、あきに何気なくしたことでも友だちがどう感じたかをわかってもらいたい。</p>
---	---	--	--

考 察

あきは前日に聞いた「3枚のおふだ」の絵本が印象に残っていたようだ。教師と2人で始めた追いかけてっこが**あき**の中では「3枚のおふだごっこ」遊びに膨らんでいった。このように**あき**は豊かなイメージやアイデアをもっている。こんな**あき**の良い面を他の子らにも伝えて、友だちと交わって遊べるような配慮していきたい。この遊びで**あき**も1人で遊ぶよりも何人か

で一緒に遊ぶ方が楽しいと感じ始めたのではないかと思う。友だちと一緒に遊んで楽しかったという体験をすることで、偶然にできた遊び相手でも親近感が育っていくであろう。このような場を今後も作っていき、友だち意識を持たせていきたいと思う。そこで、子ども達が大好きな絵本から遊びの世界につながるようなきっかけとなる環境(3匹のやぎののらがらどん遊び)を用意することにした。

6. 【3匹のやぎのがらがらどん】(自分のしたい遊びを友だちや教師に伝えようとする) 6月下旬

(前日のあきの様子) 男の子達がはじめた「3匹のやぎのがらがらどん」の遊びに誘われてもあきは「私はしない」とみんなが遊んでいる様子を少し離れた所から眺めていた。しばらくすると、ジャンケンで勝った子のところに走っていき「私とアタック(ハイタッチ)するんで」とタッチし、負けた子には「残念」と耳元でささやいていた。

他の子ども達の様子	環境と援助	あきの様子と変容
<p>⑤ 3人の男の子はお面をつけたあきを見て「トロールや、逃げろ」と歓喜の声をあげながら部屋の中を逃げる。</p> <p>⑨ 「うん、いいよ。僕は小さいがらがらどんで」「ぼくは中くらいのがらがらどん」と言いながら次々に平均台を渡る男の子達。</p> <p>⑪ あきが「だれだ。私の橋を渡るの！じゃんけんだ」とジャンケンをする。「負けたからおりて」「勝ったから行っていいよ」と言う。3人の男の子達はジャンケンの勝ち負けがわからないのであきに言われたまま従う。</p> <p>⑫ 他に4人の子が「よせて」と橋を渡りはじめる。</p> <p>⑭ 1人の男の子がジャンケンであきに負けたが、橋の上に座り込んで動かない。</p> <p>⑰ 「これ、新しい橋や。やった。こっちに行ってみる」と男の子は立ち上がり椅子を渡りだす。</p>	<p>① 平均台の上にトロールのお面を作って置いておく。</p> <p>④ 「すごいね。あきちゃん、本物のトロールみたいやな」と声をかける。</p> <p>⑦ 「あきちゃんがトロールになるから、みんなは3匹のがらがらどんになってほしいんだってどうかな?」「橋を渡ったきたらトロールとジャンケンしてほしいんだって」と男の子らに声をかける。</p> <p>⑩ 橋(平均台)に椅子を並べて渡る橋を長くしていく。</p> <p>⑯ 負けた子も橋を渡れるように分かれ道を作る。「負けたらこっちを渡って帰るのはどう?」と提案する。</p>	<p>② 登園後「まだ、みんな来てないな。早くこないかな」「『がらがらどん』する時間がなくなるわ。みんな遅すぎや」とテラスから外をのぞいて友だちの登園を待ちわびている。1人で平均台を渡ろうとしてお面を見つけ大喜びする。お面をつけると「だれだ。橋を渡るのは」とトロールになって1人で遊び始めた。</p> <p>③ 登園してきた友だちに「がらがらどんしよんで。あんた早く橋渡りな」と声をかける。</p> <p>⑥ 「違うがな!あんた達は橋を渡るんじゃ!」と叫ぶ。</p> <p>⑧ 「そういうこと。早くしな(渡りな)だれだ!おれさまの橋を渡るのは」と嬉しそうにトロールになったつもりで遊び出す。</p> <p>⑬ 「ひゃー!!こんなにたくさんのがらがらどんが、いたのか。忙しすぎじゃ」と言いながらとても嬉しそうに遊ぶ。</p> <p>⑮ 「ちょっと、あんたは負けたから降りな」と叫ぶ。</p> <p>⑱ 「先生、ええ考えやな」と言う。</p>

考 察

- お面を用意することで、遊びのイメージが広がるのではないかと考えた。他児にはあきの言葉の表現だけでは遊び方が伝わらなかったようだった。私は⑦の言葉であきの思いを代弁しながら、他の子の気持ちも大切にしていきたいと考え、両者の中を取り持つようなかわりをとった。その結果遊びが広がったように思う。
- ⑬の言葉からは大勢の友だちと遊べて心底から嬉しいあきの気持ちがわかる。この言葉の表現にはあきの性格がでている。あきは言葉の表現力は大人びているが、嬉しい時には嬉しさを素直に表現し子どもらしく素直である。これからもいろいろな遊びの中で、友だちとかかわって遊ぶ楽しさを味わわせていきたいと思う。
- ジャンケンに負けると橋から降りなければならないが、男の子は負けた後の行動を受け入れることができず、かといって進むこともできずに座りこんだのであろう。あきはルールが理解できていて⑮の言葉を発したのだと思う。5歳児であれば遊びを進めていくために対処の仕方を自分たちで考え出すであろうが、3歳児では解決策を子ども達だけで考えにくい。私は、男の子の気

考 察	持ちも大事にしたいと思い、橋を分岐させることで、勝っても負けても橋を渡り進めるようにしてみた。結果的に男の子は気持ちを立て直し、遊びを再開することができた。 あき が⑱の言葉を発したのにはそんな様子をずっと見ていたのだろう。 あき が教師の行動を評価して誉めてくれた。これから友だちとのかかわりの中で何かに行詰まることがあったとしたら、 あき なら、このことを真似てさらなるアイデアを出すかもしれないと思う。この時期の子ども達にとって教師の行動的環境は影響が大きいとあらためて感じた。
--------	---

7. 【あきと1人の女の子との口げんか】 7月

1人の女の子と私が、小麦粉粘土をのぼして型抜きをしていた。そこに砂場遊びを終えて**あき**が保育室に戻ってきた。「おもしろそうやな。私もしよう」と小麦粉粘土をのぼしだす**あき**。女の子が星型の型抜きをしているのを見ていたかと思うと、それを無言で取ってしまった。女の子も怒ってうばい返す。2人の間で「私ので!」「私のや!」と取り合いが続く。2人に他の型抜きを差し出したところでおさまらないうだろう、どのように2人を落ち着かせようと私が言葉を探していると、①「あきちゃんは、幼稚園で1番悪い子です。いじわる子、いじわる子!」と、女の子が叫んだ。すると、**あき**は「私はいじわるでない」と泣きながら型抜きを投げ返す。私はなかなか泣きやまない**あき**を抱っこしながら「いじわると言われてくやしかった?」と聞くと「うん」と、うなずく。私に寄りかかってしばらく泣きじゃくりながらも女の子の遊びを眺めている**あき**。女の子が手でのぼしている粘土から手を離れた。伸縮するのを見て「うわー!粘土、動いたで。蛇みたい」と、**あき**が大きな声で嬉しそうに叫ぶ。「ほんまや生きとるんかな。(粘土が)蛇になったんやな」と女の子が答える。2人は笑い合い、それから一緒に蛇作りをしはじめた。さっきまで喧嘩をしていたとは思えないほどの笑顔で遊びだす2人。

考 察

女の子が叫んだ①の言葉は、**あき**が自分の思いどおりにならないと大声で叫ぶ言葉である。昨日も三輪車の取り合いになり、**あき**がその女の子にこの言葉を叫んで喧嘩になった。たぶん女の子は、昨日言われたことを真似て**あき**に言ったのだろう。**あき**の方は自分がいつも言っていることなど意識がないのかもしれない。**あ**

きが泣いた時に、私は**あき**に昨日のことを話そうかと思った。しかし、2人がすぐに気持ちを切り替えて遊びだしたので、あえてなにも言わなかった。今日の出来事は、**あき**に何かを感じさせたのではないかと感じた出来事であった。喧嘩をしていたが、粘土が動く様子を見て「蛇みたい」と共感して笑い合う姿に私は感動した。この時期の子どもたちの喧嘩は根が深くない。大泣きするほど辛かったことがあってもすぐに仲直りができる。こうやって、お互いに言い合うことで、言われて辛い思いや嬉しい思いを感じて成長していくのだろう。些細なトラブルは人とのかかわりに必要なものだと思う。

8. 夏休みの登園日のお母さんとお話

登園日の迎える時、**あき**のお母さんが「今朝、幼稚園に行こうと声をかけると、突然に①『みんなから、のけものにされる』と大泣きしたのですが、**あき**は友だちがいないのでしょうか?」と話された。**あき**は「友だちが遊んでくれない」と言って泣き出したらしい。でも、園に来たら**あき**はとても明るく過ごせ、朝、泣いたことなど微塵も感じさせなかった。

1学期の後半は、**あき**は年長児とよく一緒に遊んでいた。年長児がやさしくかかわってくれるので、クラスの友だちと過ごすより年長児の遊びに入っているほうが心地よかったのであろう。6月下旬から年長児は水遊びがはじまり1時間目に小学校のプールへ行く。それで**あき**は朝の自由遊びの時間、年長児と遊ばなくなった。それでも**あき**は「遊ぼうよ」と年長組の女の子に声をかけていた。年長児から「遊べん」と答えられたと辛そうにしていた姿を何度か見たことがある。母親に言った『みんなから、のけものにされる』と同じ言葉を私にも泣きながら訴えたことが何度かあった。その都度「大き

い組さんはプールに行くから遊べないよ」と声をかけていたが、小学校のプールが見えない場所にあるし、自分たちのプールとは違うので意味がわかってなかったのかもしれない。そのことを登園日の朝に思い出して悲しくなり「みんなから、のけものにされる」と表現したかもしれないと推測する。他の要因は考えにくいのだが。母親もあきの話から、あれこれと想像したり心配したりしたのでだろう。あきは第1子なので母親も子育てを模索し、はじめてのことで悩むことも多いのではないだろうか。しかし、お母さんが「あきは『友だちにいじわるされる。みんなが遊んでくれない』と言うくせに『幼稚園は楽しい!』って言うんです。熱がある日も

休まないで大泣きするしね。幼稚園は好きみたいです」と話して下さった。この言葉はうれしく、私は少し安堵した。親子ともに初めての幼稚園生活なので不安なことはたくさんあるだろうと思う。これからもあき親子の思いに寄り添っていかねばと改めて思う。母親の気持ちにも寄り添いながら、母親と教師が共にあきの育ちを支えていけるように今後も連携していきたいと考えている。まずは、何でも話し合える関係を母親と作っていきたいと思っている。子どもの行動の背景にあるものを十分に把握し、あせらずチャンスを待つようにしていこうと思う。

8. 【車を作ろう】(教師や友だちとのイメージの違いに気づき、その面白さを知る) 11月

(前日のあきの様子) 男の子が空き箱で作った車を帰りの会の時に紹介すると、あきは「そんなの簡単、私だって作れるわ」と大きな声で言う。その男の子の側に行き*1「私はな、もっと上手に作れるんで」と言う。

遊びの様子	環境と援助	あきの様子と変容
①それぞれに自分の好きな大きさの箱を選び、タイヤをつけたり、ライト、ナンバーなどのシールをはったりして思い思いに車を作る。	②タイヤの車軸の長さや箱の長さがわかりにくいようなので1人1人に合った長さにストローと竹ひごを切り、タイヤづけの説明をする。	③走って1番に廃材コーナーにいき、箱を2つ取り、「先生タイヤつけて」と持ってくる。
⑥1人の男の子は昨日作った自動車に銀のシールをはったり、マジックで色を塗ったりする。「ナンバーつけようか」と数字のシールでナンバープレートを作る。	④あきと一緒にタイヤをつけ「あとは、あきちゃんのしたいように箱をはったり、ライトをつけたりして、かっこいい車にしてみよう」といろいろな材料に気づかせる。	⑤箱に2枚の黄色のシールをはり「できた。完成!」そして、積み木を並べて道を作り「私がやっぱり1番にできた」と嬉しそうに言いながら、車を走らせる。
⑧もう1人の男の子は絵本を見ながら「この消防車作りたいな」「先生、消防車どうすればええ?」と作ってほしいと箱を数個持ってくる。	⑦マヨネーズの赤いキャップ、黄色の○シール、ストロー、空き缶など、パトカーやライト、タンクローリーなどの車の部品になりやすい物を種類分けして出しておく。	⑨車を作っている友だちの側に行き「○○ちゃん、まだできてない?遅いね」と言って回る。自分が1番に作り上げたことが嬉しいらしい。
⑪他の子も車を作ることに興味があるようで、マヨネーズの赤いキャップを箱の上のせ「見てパトカーみたいや」「お父さんのナンバーは333」など話しながら作っていた。	⑩作りたい車の模倣ができるよう「のっぼさんの自動車工場」の絵本を目につきやすいように置いておく。	⑫男の子が「ビルが火事です。ホースで消します」と遊んでいるのを見て「どうやって作ったん?消防自動車みたいやな」とつぶやくあき。「ガソリンがないのでガソリンを入れに行きます」と男の子達が遊んでいるのを見て「私も入れよう」と真似をしようとするあき。*2「あきちゃんガソリン入れるところ作ってないやん」と女の子に言われ「そうやった。作ってくる
⑭男の子が「火事はどこですか?ピーポ」と言いながらできあがった車を走らせる。	⑬消防車に必要な材料をそろえ、絵本を見ながら男の子達と一緒に作る。	
	⑮積み木をつないだり、ビニールテープを床にはったりして道路	

<p>⑬もう1人の男の子は「これはトラックで荷物を運べるんで」とブロックを荷台に乗せて走らせる。</p>	<p>を作っていく。 ⑭あらかじめ作っておいたガソリンスタンドやビルなどをだし、遊びが広がるように環境をたしていく。</p>	<p>わ」と廃材コーナーに行く。</p>
<p>考 察</p>	<p>○ あきが男の子に向かって言った*1の言葉は、友だちが誉められたことが悔しく自分もできることをアピールしなかったのだろう。手先も器用で自分で作る力も育ってきている。早く(1番に)することに気持ちが向いているようなので、もう少しじっくりと遊ばせたい、そうするうちに遊びの面白さを味わえるように思う。</p> <p>○ 1番にこだわるのは3歳児の発達の姿なのだろうか？あきは車を早く作ることに満足していたが、友達が作り上げた車で、火を消したり、ガソリンを入れたりして遊んでいる様子に何かを感じたようだ。男の子らは車を作るという活動から、消防車に見立てたり、ガソリンを給油したりというイメージの世界での遊びに発展していった。イメージの世界を楽しむ様子を見てあきも真似てみようと思っていたのではないか。*2の言葉は、あきに対してタイミングのよいかかわりであったと思う。</p> <p>○ あきは車を走らせて遊ぶ中で、友だちの遊びに面白さを感じたり、自分にはないものに気づいたりしたようだった。友だちの真似をしてガソリンの給油口を作ったり、荷物を積み荷台をつけたりして楽しむ様子が見られ遊びが発展していった。あきは自分なりの考えをもって、自分のしたいように遊ぶ。あきの良さを認めながらも友だちの思いにも気づいたり、友だちのアイデアを取り入れたりして遊びを広げていけるように支援していきたい。</p>	

9. 【私は1番がすき】 1月

あきは朝7時50分頃に登園してくるので、いつもクラスで1番である。その後1人の男の子が来る。ある日、その子が自分よりも早くに来ていたので機嫌が悪くなり「今日はつまらない一日や」とカバンや上靴をけて怒りだす。男の子に向かって「1番は先生なんだから。あんたは2番で」と何度か言いながら、自分の気持ちを落ち着かせているようだ。翌日、自分が1番だったので「私1番だった。すごいやろ」と、次に来た子に嬉しそうに言う。男の子が「先生が1番やろ」と言った。すると**あき**は「大人はこのことには関係ないの！だから私が1番です」と、言いいながらにっこり笑う。

10. 【あなたは0番だね！】(あきが考えた0の概念) 2月

あきは、野菜が苦手で、給食を食べ終わるまでかなり時間がかかる。配膳前に「先生、給食少しにして。今日はあまりほしくないんよ、風邪もひいとるかもしれんし、頭も痛いかも」と、一生懸命に理由をつける。**あき**の姿に私はいつも笑ってしまう。体調は悪くなさそうだが、昨日の給食で遅くなったことが辛かったのだろうと思い、今日は少なく配膳した。「私、早くに食べれるわ。1番になるぞ！」と、はり

きって食べだした。**あき**は今日は自分が1番に終わるだろうと予想しているようだ。そんな中「ごちそうさま。ぼくが1番や」と1人の男の子が食べ終わった。「えーなんでよ」と口をとがらせる**あき**。「**あき**ちゃんも今日は早いよ。すごいね」と私が言ったが「あの子はずるすぎや」と怒る**あき**。側でいた子が①「なんで？ずるないやん」と言うと「あんたは関係ないから、よけいなこと言わんといて」と、言い返す**あき**。他の子が「1番はA君に決まりでしょう」と言った。「もう、みんなで嫌なこと言わんといて。あーあ！頭にきた」と怒る**あき**。やる気なさそうに食べ終わると食器を片づけ、ため息をつきながら歯磨きのコップを取り廊下にていき歯磨きをする**あき**。しばらくして、満悦した様子でスキップで**あき**が戻ってきた。②「ねー！みんな。A君は0番やったんや。だから、私が1番なんで。今日の給食はA君が0番で私が1番でした」と、大きな声で言いにっこりと笑う。すっかり機嫌がなおっていた。

9と10の考察

1番になりたがる**あき**のこだわりは、どこからでてきたのかわからない。3歳児の発達の姿なのだろうか？このクラスの中でこれほど1番にこだわるのは**あき**だけであったが、最近**あき**

の影響を受けて他の子ども「1番」を意識するようになりつつある。**あき**は家でも1番にこだわるらしく2階から降りる時も**あき**が1番に降り、その後ろを父、母が降りる、食卓の椅子に座るのも自分より先に誰かが座るとやり直しするというエピソードを母親から聞いたことがある。給食では、念願の1番に手が届きそうなところでA君になってしまい悔しく「ずるい」と言ったのだろう。そのことを非難され、ますますストレスがたまったようだ。しかし、歯磨きをする間、自分で解決策を考えたのか、ひらめいたのか?②の言葉の表現はすごいと思う。「0番」を考え出し、ふっきたように笑顔で戻ってきた彼女に私は感心した。自分なりに立ち直りの策を考えたようだ。周りの子は**あき**の言っていることの意味(0番のこと)がわからずにぼかんとしていたが、**あき**は満足して笑顔で外に遊びに出て行った。**あき**は悔しい気持ちを自分で立て直すことができた。自分で気持ちを切り替え立て直していく力がついてきているようだ。

一年間を振り返って

幼稚園で初めて集団生活を経験する幼児がほとんどのクラスであった。自分の思い通りになる家庭の生活から環境が大きく変わる。3歳児は自己中心性が強く、めいめいが自分の思いのままに行動する。集団生活の中では、それぞれの子が自分の都合のよいように考え行動を取るので衝突がたえない。**あき**だけでなく、みんな個性が非常に顕著に表れていると感じ、これが3歳児の発達の姿なのだと思う。

入園当初の4月は、子ども達は友だちには無関心であったように思う。友だちよりも教師との1対1でのかかわりを求める。4月の**あき**の自転車の遊びの場面にも表れているように「先生、見てて」と自分のほうに教師の目を向けたがる。その時期に教師との温かい関係ができ、幼児が安定した気持ちになると、だんだんに周りの子が気になりはじめるのではないかと思った。4月は、子ども達が安心して自分を出せるように気を配ってきた。家庭の延長のように泣

きたい時に泣け、いやな時は「いや」と言えるようにしていくことで子ども達は情緒が安定すると考え、一人ひとりの寄り添うようにした。

5月は、教師の立ち位置が一つのポイントになるように感じた。子ども達は「先生なにしているの?」と教師の周りに集まってくる。そして、教師の側で遊びが始まる。教師が移動すると子どもらもついてくる。ほとんどの子が教師の周りで遊ぶことが多い。また、**あき**のように自分から遊びを見つけ離れて一人で遊んでいても時々、教師の居場所を確認し視線を送ってくる。私が離れた場所からも「あなたを見てるよ」と微笑みかえすと、**あき**もまた笑顔になり遊びだすといった場面が多々見られた。

6月は、友達とかかわれるような遊びのきっかけづくりをしていった。「3匹のやぎのがらがらどん」の遊びでは、**あき**は初めのうちは友だちの遊びを傍観していた。遊びたいけれどどうやって遊びに入ろうかと、**あき**なりに気持ちの伝え方を悩んでいるように感じられた。そこでトロールのお面を置いておくことで**あき**が遊びに入れるきっかけを作ってみた。お面をつけることで抵抗なく遊びに入れ、一緒に遊ぶ友達がだんだんに増えていった。

7月の喧嘩は、友だち関係に大きな意味があったと思う。喧嘩は他者を意識するきっかけの一つであると思う。この時期の喧嘩は「自己主張のぶつかり合い」であるが、このぶつかり合いこそが社会性、協調性につながってくる。この時期に喧嘩をしていないと4、5歳児になって社会性、協調性が育ちにくいのではないかと思う。教師の役割として、子どものトラブルを見守りながら、その時、その子が何を感じているかを探り、その子に寄り添うことが大切はないかと思った。悔しい気持ちになっている時には「悔しかったね」と共に感じて寄り添うことが大事なのではないかと考える。「いじめ」が社会問題になってきている昨今、子どもが「今日幼稚園で喧嘩をしたよ」と話したとする。そんなことが何度か続くと、親は「うちの子はいじめられているのではないか」と心配になる。幼稚園としては、なるべく喧嘩をさせな

い配慮をしてしまいがちである。しかし、幼児期の喧嘩はいじめのような陰湿なものではない。喧嘩を奨励するわけではないがこの時期の子どもには喧嘩が心の肥やしになるように思う。何が原因でトラブルになったのか、お互いがどんな気持ちになり、何を感じているかを教師が探り、子にかかわっていくことが大事だと思う。

11月の車遊びでは、**あき**と男の子らは遊びの価値観に違いがあったと思う。**あき**は車を空き箱で早く作り終えたことに満足していた。男の子らは、空き箱を車に見立て、イメージを膨らませて、作った消防車で火を消すなどごっこ遊びを楽しんでいた。ごっこ遊びをさらに楽しくするために給油口やホースを作っていた。彼らは「早く車を作る」ということには価値をもっていないので、**あき**が一番作ったことを自慢していても、彼らはそのことがすごいとは思わなかったようだ。**あき**はそんな友達の様子を見て気づき、「**あき**ちゃんガソリン入れるところ作ってないやん」の友だちの言葉を素直に受け入れ「そうやった。作ってくるわ」と廃材コーナーに行き、給油口を作り始めたのだろう。私は**あき**たちが見立て遊びを楽しめるように空き箱で作った「ガソリンスタンド」「火事になっているビル」を子ども達の目につくように出した。3歳児はイメージの世界で遊ぶことが得意なので、ビニールのテープを貼った床が道路になり、**あき**箱のガソリンスタンドやビルを本物のように見立てて遊んでいた。**あき**も作った車を走らせて空想の町で友だちと遊びを楽しむことができた。

1年間を振り返ると、5月から7月と11月頃には友だち関係の発達に大きな変化が表れたように思う。教師とのかかわりが密であった4月からだんだんに周りの友だちに関心をもつようになる。そして、友だちとかかわりトラブルが起こる。悔しさや悲しくなった時に教師がその思いを共感してあげると、また、友だちにかかわっていかうとする。その繰り返しの生活の中で、友だちへの関心が大きくなっていっているようだ。

1月2月になると、自分で気持ちを立て直すようにようになってきた。給食で1番になれそうなのになれなかったことは**あき**にとって非常に悔しいことであったに違いない。私は**あき**が怒るか、悔し泣きをするだろうと思っていた。この場面では私は何も支援をしたり、気持ちをコントロールさせる手立てをしたりしていないが**あき**は自分で気持ちを整理した。0番を考え出し、満足することは、ある意味まだ自分中心の考え方であろうが、自分で気持ちを切り替え立て直したことは成長ではないだろうかと思う。

一年間の記録を読み直すうちに 私自身の人間性と道徳性に向き合うことになったようにも思う。子どもを育てようとしているつもりが、私自身の言動や考え方を振りかえり反省し、自分自身に向き合われる。子どもとの生活の中で子どもから学んでいるのは私なのだろうと思う。